アジ研研究者による自著紹介

研究の辺境をゆく

――山岡加奈子編『ハイチとドミニカ共和国――ひとつの島に共存するカリブ二国の発展と今――』アジ研選書 No.48、アジア経済研究所、2018 年 3 月――

山岡　加奈子

アジ研の研究会として、ハイチとドミニカ共和国を取り上げることになった直接のきっかけは、今は大学に移られた当時の上司が、「アジ研のラテンアメリカ研究の地位を高めるため、日本であまり取り上げられることがない国々を取り上げた研究を実施してほしい」と私に要請（命令？）されたことにある。2014 年に成果を出版したコスタリカの研究会がその第一弾であり、今回のハイチとドミニカ共和国の研究会は、第二弾となる。

ラテンアメリカの中であまり取り上げられない国は結構多いが、その中でなぜハイチとドミニカ共和国を選んだか。編者は長年キューバを担当国としており、キューバ島のすぐ東隣にあるイスパニョーラ島は、ずっと気になる存在であった。とくに長年中南米最貧国の汚名をそそぐことができないでいるハイチは、怖くてなかなか近寄れないけれどもいつか近づいてみたいと思う存在だった。編者がまだアジ研に入所したばかりの 1990 年代初頭に、JICA の招きで来日されていたハイチ国立大学の先生たちにお会いしたが、彼らの非常に教養のある、視野の広い見識や、数カ国語を流暢に操る語学力と、「最貧国」のイメージとのギャップが大きく、非常に興味をそそられていたのである。

ハイチだけでなくドミニカ共和国も一緒に取り上げたのは、ハイチは入手できる資料に限界があることが予想され、経済がハイチよりも発展しているドミニカ共和国を一緒に分析しないと、本として成立しないだろうという、きわめて現実的な判断からであった。

今から振り返れば、この 2 カ国を対比させることで初めて見えてくるものが多くあり、結果的には成功だった。ただハイチよりドミニカ共和国のほうが研究しやすいだろうという予想はあまり当たらなかった。経済データについては確かにドミニカ共和国のほうが入手できるものがずっと多かったが、先行研究の量はハイチのほうがドミニカ共和国よりも多かった。とくに日本語の先行研究については、ドミニカ共和国についてはほとんどなく、ハイチとの対比で初めて議論が組み立てられた面がある。ハイチは近代世界で初めて、黒人系の人々が独立国家を樹立した国であり、文学や美術など文化面で世界的に評価されていることから、歴史学や人類学からの関心が日本でも高く、すぐれた先行研究もいくつか存在した。

本書が提起した疑問は 2 つある。1 つは「なぜ日本の北海道より少し小さいくらいの面積の島に、国が 2 つもあるのか」（他のカリブ島嶼国は、1 つの島に 1 つ以上の国はない）という疑問である。もう 1 つの疑問は、「なぜこの島を分け合うハイチとドミニカ共和国は、経済面でも、政治面でも、対照的な発展をたどってきたのだろうか」である。1 章から 4 章までは後者の疑問に、5 章は前者



http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Sensho/048.html

の疑問に答えることになった。

ある国が日本で（あるいは世界で）研究者にあまり取り上げられない、というのは、それなりに理由があるものだ。資料が少なかったり、先行研究が少なかったり、調査そのものが困難だったり。この研究会の場合は、外部執筆者の中に、ドミニカ共和国を比較対象に含めた研究をされたことがある先生がおり、JICA でハイチ援助研究プロジェクトに参加されている先生が３人おられたことが大変助けになった。また、現地の日本大使館の方々には、現地にコネクションがない我々に、アポイントの取得や信頼できるレンタカー会社の紹介など、さまざまな面で非常にお世話になった。ハイチでの調査では、治安面での懸念から、ボディガードを雇用することが必要となり、大使館に信頼できる警備会社を紹介していただいた。予約のために、紹介された警備会社に日本から連絡しても全く返答がないため、予約から契約の確認、最後の支払いまで大使館にお世話になった。

１回目の調査では、編者と一緒に出張した外部委員の先生がハイチで体調を崩した後、ドミニカ共和国で緊急入院した。初めての土地で現地のどの病院に行けばいいのかわからないので、まず大使館の医務官の方に診ていただき、医務官に付き添っていただいて１つ目の病院に入院、その病院の対応が悪いとの医務官の方のご判断で、夜になってから２つ目の病院に移って検査、集中治療室へ。このときの大使館の助けのおかげで、彼は命拾いした。

研究会で一緒に出張したのは編者だけだったので、日本大使館にとっていただいた２人分のアポイントのすべてを編者が１人でこなす一方、出張予定を変更して日本に帰国してもらうための航空券変更手続きなど、時差のある日本とのやり取りが夜間に続き、睡眠がとれなかった。他方外部委員ご本人は、病院で治療が続くものの、自覚症状もなくなり、１日何もすることがない。元気だったはずの編者は寝る間もなく走り回り、集中治療室にいる先生は暇を持て余す。しかしもちろん人命第一である。

あまり外国人が研究することがない国は、研究そのものは大変だが現地の人たちには大事にしていただける。とくにハイチでは、多くの人々に、「ぜひハイチの本当の姿を知ってほしい」と言われた。ハイチと長い付き合いがあり、著名な NGO を率いるポール・ファーマー医師が、「ハイチ人は、何かというと『最貧国』と言われることにうんざりしている」と書いていたとおりだ。原稿に行き詰まった時に編者を励ましてくれたのは、調査で出会ったこのハイチの人々の言葉だった。

日本であまり取り上げられない国を取り上げ、とくに現地の実情や背景をよく理解する地域研究のスタンスから研究し、出版までこぎつけるためには、多くの方々の協力を得ることが不可欠だ。①この取り上げられない国と何らかの形でかかわった先達に話を聞き、協力していただくこと、②国内外の専門家にできるだけ協力をお願いし、先行研究や資料の所在を教えていただくこと、を地道に繰り返すことが大切ではないかと思う。

（やまおか　かなこ／アジア経済研究所　地域研究センター）